

近くて“近い国”中国

最近、中国の長江文明に対する関心が高まっている。秦の統一以来、歴代王朝は黄河中流の中原に都を定めてきたこともあって、中国では、南方は野蛮扱いされ、北優先の歴史観が貫かれてきた。このため長江流域に発展した文明が存在していたことは封印状態になっていたが、湖南省の城頭山遺跡、浙江省の河姆渡遺跡、良渚遺跡等が発掘されるにともなって、四大文明にも匹敵する長江文明が存在していた可能性を否定することは難しくなってきた。

長江文明の存在が確認されるにしたがい、黄河文明を含む四大文明が小麦と牧畜を生業としていたのに対して、長江文明は稲作と漁労を生業とする大きく性格を異にした文明であることが判明してきた。また、これまで中国・雲南省が稲作起源地の地である可能性が大とされてきたが、考古学、DNA分析の発達等にともない、雲南省の稲作の起源は4400年前までしかさかのぼれないことがわかってきた一方で、長江中流の湖南省にある玉蟾岩遺跡の1万2千年前の地層から栽培種とみられる稲籾が発見された。さらに河姆渡遺跡で7000年前、良渚遺跡で5000年前のイネが発見され、これによって稲作は長江中流域を起源地とし、下流域に広がり、半農半漁の民でもあった河姆渡の人々が東シナ海を渡って我が国に稲作を伝播したものと推定されている。なお、この流れとは逆に長江中流域をさかのぼり、雲南省の山岳地帯からメコン川を下って東南アジアにも広がっていったとみられている。

このイネは熱帯ジャポニカといわれ、焼畑のようなスタイルで栽培されていたが、ちょうど我が国で熱帯ジャポニカの栽培が開始されたところに、第二幕として長江中流域では水田稲作が誕生した。これが温帯ジャポニカに変化し、朝鮮半島を経由して日本へ入り、本格的な瑞穂の国としての幕開けとなったのである。（文芸春秋2002年4月号「世界最古『長江文明』発掘記」、NHK出版『日本人はるかな旅』による）

稲作伝播の歴史を持ち出すまでもなく、農業から文物、宗教に至るまで、我が国は中国からきわめて多くのものを導入し、発展させてきた。そして今日では、我が国の対中国貿易は、全輸出の5.6%、全輸入の13.8%（2001年度貿易統計速報（通関ベース））を占めるなど、密接不可分な関係という以上に、東アジア相互補完体制とでもいうべき一体的関係が構築されつつある。人口13億人、広大な面積と多様性に富む大国中国が、WTOに加盟し、世界経済の中でいかなる発展を遂げていくのかきわめて注目される場所である。グローバル化の進行、経済価値への偏重、軍事情勢の緊迫化、そして資源の限界性、環境等困難な諸問題が露呈する中で、中国経済のソフトランディングと政治的安定は、東アジアにとってはもちろんのこと、21世紀の世界経済と平和にとって絶対不可欠である。

折しも、今年の日中国交回復30周年にあたる。グローバルな視点をもって、より実質的な日中交流を強力にすすめていくことが求められる。